



熊野本宮大社に向けて 縦横に伸びる道のり

平安時代から鎌倉時代にかけて上皇やその后などの女院が、熊野参詣の旅をしました。この旅のことを熊野御幸と呼んでいます。「御幸」とは、上皇や法皇、女院の外出のこと、天皇の場合は「行幸」といいます。

907年の宇多法皇の御幸から987年の花山法皇、その後、1090年の白河上皇が熊野に御幸して以来、白河・鳥羽・崇徳・後白河・後鳥羽の五上皇が参詣を繰り返すこととなります。

また、1217年、後鳥羽上皇と修明門院の御幸には814人のお供がついた記録が残されていますが、お供をする貴族のお供も含めるとかなりの人数であったと思われます。

京都を出て熊野三山に参詣し、戻るまでの行程は約1か月といわれています。熊野への参詣道には、紀伊路（紀路）・伊勢路・小辺路の3ルートがあり、紀伊路は、田辺で中辺路と大辺路に分かれます。後白河法皇撰による歌謡集（平安時代末期）に「熊野へまいるは紀路と伊勢路のどれ近しどれ遠し 広大慈悲の道なれば紀路も伊勢路も遠からず」という歌が残されています。

藤原為房の「為房卿記」や源師時の「長秋記」、藤原定家の「熊野御幸記」などから代表的なル



トをたどると、京都から船で淀川を下り、大阪・堺を経て紀伊半島西岸を海沿いに南下し、田辺へ向かいました。ここからは東へ転じて山中を進み、本宮へ。その後、新宮・那智を経て、再び本宮に戻りました。上皇や女院は、全ての行程を徒歩で行くのではなく、川では船に乗り、陸では輿に乗りながら、途中の王子社では相撲や舞を奉納しつつ旅の疲れを癒やしていたようです。参詣道には、熊野権現の御子神を祀る王子社が建立され、道の整備とともに増えていき、藤原定家の記録（1201年）には既に80以上の王子社が記されています。

※王子社は、中継所の役目を果たし、参詣者は王子社に供え物をして旅の無事を祈りながら熊野に向かいました。

歴史の道、信仰の道 熊野古道の案内人

「熊野本宮語り部の会」会長の坂本勲生さんは、熊野古道が世界遺産に登録される前の昭和63年から語り部となりました。現在、「熊野本宮語り部の会」には60歳代の方々を中心に約30名のメンバーが登録されています。歴史や文化をはじめ、動植物のことなど、観光客からのあらゆる質問に答えられるように定期的に集っては研修を重ねています。

平成16年の世界遺産登録から、熊野古道を歩く観光客は外国人も含め年々増加しています。「時間ができると訪れたくなる場所」として何度も訪れる人も多く、熊野古道は、あらゆる人を優しく包み込む不思議な力にあふれた場所といえます。

「素晴らしい自然の中に『祈りの道』が今も残されていることに、語り部である私自身がいつも感動をもらっています。語り部の役割は、単に熊野古道の歴史や伝説を説明するだけではありません。何よりも大切なのは、観光客と地元の人がコミュニケーションをとることです。説明をしながら歩く道すがら、茶摘みをする人や農作業をしている人たちと会話を楽しんでもらうようにしています。地元の人が地元言葉で、地

元の食文化や情報を楽しそうに話すと。これが最高の『おもてなし』だと思ふのです」と坂本さんは言います。

文化・伝統は、伝え続けなければなくなってしまうもの。坂本さんは、三里小学校の校長を退職後、小学校のボランティアグループ「語り部ジュニア」を作りました。何度も熊野古道を歩き、自分たちで地図を作り、歴史や文化を勉強して、実際に観光客を案内しているのです。これらの活動を基に、平成27年度から、田辺市内全ての小中学校が、ふるさとについて語る「田辺市地域語り部ジュニア」に取り組んでいます。



田辺市熊野古道語り部ジュニア
近野小学校（上）と三里小学校（下）



熊野本宮語り部の会 会長
さかもと いさお
坂本 勲生さん

The Kumano Hongu Guide Association has about thirty registered guides, mainly in their sixties. They hold periodic study sessions on everything from history and culture, to plant and animal life, with a goal of being able to answer all of tourists' questions.